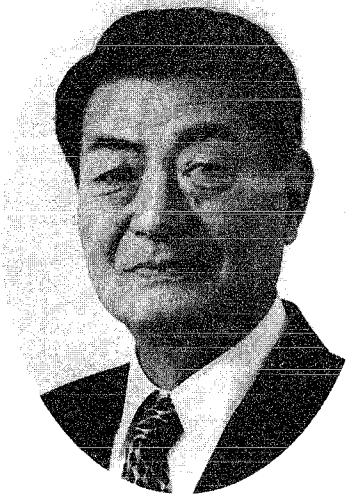


年頭のご挨拶



小須戸町長 佐藤 太加志

新年おめでとうございます。町民の皆様には、心穏やかに新世紀二年目の新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

昨年は二十一世紀幕開けの年でありましたので、年頭にあたり特に我が国・我が地域、そして世界の平和と安全を祈念した次第でありましたが、誠に残念なことに、海洋実習船「えひめ丸」の事故や、狂牛病の問題、さらには驚愕と激怒して余りある、米国での同時多発テロなど想像を絶する事件が発生しました。

介護支援センターが設置され、このいずれの運営についても、社会福祉法人 中浦原福祉会（本部 亀田町）に業務移管がされます。

この特養の完成により構成市、町の方々にとって大きな福音となりますと共に、当町にとっても更に、きめ細やかな福祉の向上に寄与できますので、町民皆様と共に喜びたいと存じます。

尚、この特養建設用地につきましても、数十年前に地域の皆様と地権者の方々のご協力を頂いた土地であり、今日このように立派に活用させて頂きましたことに、改めて感謝を申し上げます。また当時、現新津南高校の誘致運動の中でこの用地を取得され、並々ならぬご努力を頂きました、五十嵐重雄元町長様はじめ関係の皆様には深甚なる敬意と感謝の意を表するものであります。

次に市町村合併について申し上げます。近年この合併問題が平成十七年三月までの合併特例法の期限を目前にして、急速に論議されるようになりました。

名前付けされ、誠に御目出度く衷心よりお喜びとお祝いを申し上げます。次第であります。

二十一世紀に於ける我が国の大切な課題の一つとして「人の心、まごころ」のある社会づくりの推進が必要だと思っておりますが、新宮様の御名前は、私たち国民に対し、「まごころ」を指標とした、姿なき、声なき道しるべとして示唆いただいたものと心して、大切にしていきたいと思います。次に行政面について、

また、国内では小・幼児に対する虐待や犯行など、痛々しい事犯をはじめ幾多の犯罪や事件が報じられました。一方、社会では経済不況の荒波が治まることを知らず、さらなる不安感を増幅している実態であり、暗く落ち着かない世情をかもし出しております。このような世相の中で全国民に大きな光明を照らしてくれたのは皇太子殿下ご夫妻の新宮様のご誕生でありました。御名は（敬宮 愛子）様と御

まず、合併について考える基本は、地域の建設計画（将来ビジョンの策定）をはじめとして、住民福祉や行政サービスの面のメリット、デメリットの研究をしなければなりません。そしてこれらに係る情報を住民の皆様提供し、意見を聞き、最終的には住民意思を尊重した結論にならうかと思えます。

行政当局としては、これらの研究プロセスと併せて、近隣はもとより関係する自治体間での協議を進めながら判断していかなければならないと思っております。地方自治に於ける行政の仕組みも大きな変革期に入りました。安易な取り組み方では他に遅れ、置き去りになることは必定であります。私も最大限の努力を尽しながら、真に住み良い、希望のある地域社会の建設に更なる努力をしてまいります。

また、合併について考える基本は、地域の建設計画（将来ビジョンの策定）をはじめとして、住民福祉や行政サービスの面のメリット、デメリットの研究をしなければなりません。そしてこれらに係る情報を住民の皆様提供し、意見を聞き、最終的には住民意思を尊重した結論にならうかと思えます。



人と馬との
長いつきあい

「馬には乗ってみろ、人には添うてみろ」「馬の背をわける」「生馬の目を抜く」……。馬に関する慣用語や諺は数知れませんが、馬がいかに人と深くかわってきたかがうかがわれます。馬が最初に家畜化されたのは、今から五千年ほど前の中央アジアのこと。以来、人や荷を運んだり、物をひっぱったり、農耕を助けたり、戦場で働いたり、さまざまな場面で大きな役割を果たしてきました、その国や地域に大昔からいる馬を「在

山科の木幡の山を馬はあれど歩ゆ吾が来し汝を念ひかね
「私には馬があるが、あなたを思う心に耐えかねて、山科の木幡の山道を歩いてきたのです」という恋歌です。人麻呂のように宮廷仕える階級の人が馬を所有できたことが分かります。

「走る芸術」
「馬の耳に念仏」
馬と聞くと真っ先に競馬を連想される方も多いと思います。馬同士を走り競わせる行事は、走馬、競馬などといって、奈良時代から行われていました。特に端午の節句（五月五日）の競馬は恒例で、ときの天皇が臨観したとの記録が残っています。現代では、競馬といえはサラブレッド。より速く走るようにと、品種改良を重ねてつくりあげられた馬です。広い胸幅、よく発達した後軀、四百キロを超す体を支える細い脚。たてがみをなびかせて走る姿は、「走る芸術品」といわれるだけあって、

ほればれとする美しさです。一方で「馬の耳に念仏」「馬耳東風」と、無反応、役立たずの代表のようにいわれる馬の耳。私たちが何気なく使ってしまう諺ですがこれは誤解と考えるとさそうです。馬の耳は、前方にある物の距離を測るなど、優れた機能をもっています。「馬の耳に念仏」は、悠然とした馬の姿から連想されたものなのでしょうが、馬にとっては迷惑な話ですね。

馬は、人間の願いごとにも関係があります。そう、絵馬です。その昔、神に祈願してかなえられたとき、神馬とするように馬を献納しました。しかし、貧しい民は馬を納めることができないうので、代わりに馬の絵を描いたり、馬の形に作った木片を献じたりしました。それが絵馬の始まりだといわれています。

午年の今年もまた、神社にはたくさん絵馬が献納されることとしましょう。一年を健康に、無事に過ごせますように、そして世界に平和が訪れますようにと、心から願わずにいられません。